

うじいえ つねお
氏家 常雄

我が酒人生

●自治労・書記長

BSで放映している「吉田類の酒場放浪記」が好きな番組だ。

私は、本当に酒を飲み始めたのは、学生時代の二十歳になってからだ。最初は日本酒を友人宅に持ち寄り、朝方まで何だかんだとダベリングしながら飲んでしたが、その当時はコップ一杯が限度で、それ以上は絶対無理だった。これは絶対に体に合わないと思った。

実は、父は日本酒が大好きだった。私は、子ども心に毎日、毎日父が仕事後に、かなり酔っぱらって帰ってきたことを覚えている。父は国鉄に勤め仙台まで毎日通っていた。家は福島県の常磐線新地駅（今は津波に流され不通となっている）。仙台まで約一時間。当時は上野発青森行きの蒸気機関車で通勤していた。当時、父は仕事が終わった後、汽車のボックス型の座席でコップ酒を飲み、家に帰るまでにまたどこかで飲んできたようで、家に帰るまでにはご機嫌がかなり良かった。た

だ、母はそのことが心配で父が帰るまで気が気でなかったようで、ずっと囲炉裏で衣服の繕いをしながら待っていたのを覚えている。

そんなことを見てきたものだから、酒だけは絶対に飲まないようにとその当時は心に（笑）決めていた。ただ学生仲間の付き合いで先述したように、ちょっとだけたしなめる程度だ。酒よりはバナナパフェやババロア（今や古いですけど）が大好きだった。

そんなことがあって、就職しても酒の付き合いは程々にしていた。というか飲めなかったし、美味しいと思わなかった。趣が変わったのは、やはり結婚後に単組の組合活動に参加したころからだった。当時は、語弊があるかもしれないが、組合活動後イコール酒屋に直行みたいで、飲めないものが話に参加するのは非常に辛く、時計ばかり気にしていたが、諸先輩の話は延々と続くのでどうしようもなかった。

それで思いついた。これは身を挺にしても



ちょっとだけは付き合えるようにしようと。

それからが努力の積み重ねだった。妻の協力を得て、ビール一本、確かアサヒスタイナーというビールの小瓶があったが、それを二人で一本分け合うことにし飲み始め、日本酒や焼酎、ウイスキーなど少しずつ飲み比べることにした。妻は愛媛出身なので日本酒？が好きなようであったが、私はどちらかという父とも違い、あのビールの「のど越しの良さ」が気分爽快になったような気がした。

それで、一日一本アサヒスタイナーを半分ずつ分け合って飲んだものだ。それが縁かもしれないが、日に日にビールの量が増え、今や毎晩ビールがない生活は考えられなくなってしまった。ビールだったら結構いける口だろうか。周りからもよくこんなにビールばかりと言われるほどだ。でも美味しいのはやっぱりビールだ。冷蔵庫はビールが陣取っている。

父が健在のころ、田舎に帰ると二人で結構

飲みあい、母から「常雄は父ちゃんとやっばりそっくりだ」とよく言われたものだ。その父が、我が家に遊びに来た時に、子どもも小さく生活がきつく、紙パックの一升入り690円の日本酒を提供したことがある。父は、「この酒は美味しいなー。なんという酒だ」と聞かれたときは困ってしまったことを今でも覚えている。

そんなことが我が酒人生だが、宣伝するわけではないが、あのテレビ番組は、下町の大衆居酒屋を周り歩いて酒を飲みかわす番組だが、単組で飲み歩いたころを良く思い出す。